

—書評—

堀川敏寛著『聖書翻訳者ブーバー』
(新教出版社、2018年2月28日、325頁) 定価 4100円＋税

平岡光太郎

マルティン・ブーバー (Martin Buber, 1878–1965) が、波多野精一 (1877–1950) により本邦で初めて紹介されてから、およそ 80 年が経とうとしている。哲学の領域における波多野のブーバー受容があったのち、ブーバーに再び焦点が当たるようになるのは 1960 年代以降のことで、彼の対話思想は特に教育学やプロテスタント神学の領域で注目されてきた。近年においては、他者の問題を扱ったエマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Lévinas, 1906–1995) などにより、ブーバーの対話思想が批判的に受容されたことが再確認される状況にある。堀川敏寛氏による『聖書翻訳者ブーバー』は、上記のような展開のなか、「聖書翻訳者」としてのブーバーという新たな側面を明らかにすることを試みる。

たしかにブーバーの聖書理解については、彼の著作の日本語訳¹や研究書²、その他数多くの研究論文などで取り上げられているものの、その翻訳論に特化したものはあまり見られない³。このような状況の中で、ブーバーの翻訳論を正面から扱っていることが堀川氏の研究の画期的な点である。ちなみにブーバーの聖書翻訳は、ブーバー／ローゼンツヴァイク訳ヘブライ語聖書完成から 50 年を迎えた 2011 年あたりから、マルティン・ブーバー学会 (Martin Buber-Gesellschaft) などにおいて本格的に取り扱われるようになった主題であり、堀川氏の研究もこの国際的な研究動向の流れの中に位置づけることができる。

本書は、ブーバー研究の現状と方法論を扱う序論、予備的考察としての第 1 編、本論となる聖書翻訳論を扱う第 2 編 (結論は第 2 編の最後に収められている) の 3 部構成をもつ。以下、3 部の各章におけるタイトルを提示する。【序論】第 1 章「ブーバー研究の動向」、第 2 章「ブーバー自身の研究スタイル」、第 3 章「ブーバー研究の動向に対する筆者の見解」、第 4 章「本研究の視点・方法・独自性」、【第 1 編】第 1 章「基礎的存在論：関係内存在」、第 2 章「汝の始原性と神の蝕」、第 3 章「宗教性の再評価」、第 4 章「倫理と宗教性」、第 1 編の結び「ブーバーと宗教性」【第 2 編】第 1 章「ブーバー聖書翻訳の評価」、第 2 章「聖書言語論」、第 3 章「聖書翻訳の方法論」、第 4 章「ブーバー方法論の聖書学的位置づけ」、第 5 章

「神名の翻訳における我ー汝」、第6章「ヤコブ物語の対面における我ー汝」、第7章「アブラハム物語における預言者の特徴」、第8章「預言者イザヤから第2イザヤへ」、第9章「預言者の問題と翻訳の意義」、結論「汝としての聖書 語られる言葉と語られた言葉」。なお第1編に「我ー汝から聖書へ」、第2編に「聖書から我ー汝へ」という副題が付されており、各章のタイトルも合わせて見るならば、ブーバーの対話思想から彼の聖書理解を、またその聖書理解から対話思想を照射することによって、ブーバーの思想を明らかにしようとする著者の意図が伺える。

本書において、著者が特に解明しようとする点は以下の3点となる(本書57頁)。1) 聖書翻訳と対話的原理の影響関係は、どちらからどちらへのものか。また両者はなぜ関連し合うのか。2) ブーバー聖書解釈の方法論は何か。旧約学でブーバーはどう評価されてきたのか。特に彼が、聖書の根源的なものを求めると同時に、聖書の最終形態に見られる構造を分析する姿勢は、矛盾しているように見えるが、どう整合性がつくのか。3) 果たしてブーバーが意図した翻訳の目的とその方法論が、具体的な翻訳の事例のなかで実現されているのか。ブーバーはヘブライ語聖書を全て訳したため、各項目の訳語を検討し、翻訳理論が反映されているか否かの検討作業。以下の要約的な説明においては、この3点を中心にまとめることを試みる。

第1編において「哲学と宗教」から「宗教と倫理」という議論が展開する中で、ブーバーの我ー汝思想は、哲学ではなく倫理の問題に位置づけられる。著者によると「ブーバーは哲学者ではなく、あえて名づけるならば宗教的な倫理思想家」(本書97頁)であるが、この理解については、モーリス・フリードマンの見解に依拠している。それによれば、倫理学への伝統的な接近はギリシア的であるのに対し、ブーバーによる倫理学への接近は聖書的であった。ここでの「ギリシア的」とは、外的で普遍的な倫理的規則を求める在り様で、特定の状況に先立つ普遍かつ抽象的な掟を求める立場であるのに対し、「聖書的」とは、個別の具体的な状況において、内的な神との対話を通して、神からの命令をその都度求める立場である。ブーバーの我ー汝思想は、聖書における宗教性、つまり、「語りかけの受容や言葉との出会い」と切り離せないのである。

第2編において、ブーバー訳の聖書は、いわゆる通常のドイツ語の文法構造に還元されず、ヘブライ語の語順、韻律、文法構造に従順な、ある種の原文主義に則ったものであることが指摘される(本書109頁)。ブーバーは在り来りのものとして、読者が聖書の言葉と出会うことを望まなかった。非日常的なドイツ語表現になったとしても、あえて馴染みのないものとなるように、訳したのであり、これは当時のドイツの宗教史学派が試みた、一般読者に分かりやすい翻訳を目指すという姿勢と真っ向から対立するものであった。

ブーバーが聖書を翻訳する際、(a) ライトヴォルト様式、(b) 変化形成的対話法、(c) 三次元構造の3つの手法が見られる。

(a) ライトヴォルト様式は、ワーグナーのオペラを分析したヴォルツォーゲン (Hans von Wolzogen, 1848–1938) が用いていたライトモチーフ (Leitmotiv) にブーバーが着想を得たものである。ライトモチーフは、音楽的仕掛けとして用いられた繰り返しを、19世紀の作家や文芸評論家が文学的仕掛けに応用した解釈上のツールであった。これに対し、ブーバーが考案したライトヴォルトとは、聖書テキストを貫いて散在し、互いに関連しあっているキーワード、つまり、同じ語根をもつ単語の反復に着目することであった。ブーバーによると、聖書における同じ語根から派生した語の反復や繰り返しを通して、特徴的な音声を生じさせ、奇異な印象が読者に感性的に迫ってくることにより、その意味が明らかになるのである (本書 115 頁)。

(b) 変化形成的対話法とは、聖書と向き合うことを通して、読者に対話的關係性を喚起させることを意図した手法となる。つまり、聖書との対話の中で、「人生に方向をもたらすような啓示体験」が読者に起こり、この体験を通して、「完全なる人間」や「間柄的な人間」といった人間形成がなされるのである (本書 119 頁)。ユダヤ教の正典であることから、朗読義務のあるものとして聖書を単に捉えるのではなく、現代人が喪失している対話的關係性を回復するための書として捉えることを、ブーバーは求める。またヘブライ語聖書は「ミクラ」(朗誦) という名前をもつことから、「音読」の必要性が強調される。文字を読んで意味を理解するだけでは不十分で、音読により、聖書から語りかけてくる神的声と出会うことが重要なのである。

(c) 三次元構造については、ブーバー／ローゼンツヴァイクの翻訳理論を参照しつつ、聖書のフランス語訳を刊行したアンドレ・ネエル (André Neher, 1914–1988) による理解を下敷きにする。その上で、この三次元を以下のブーバー独自の概念で説明している。1) 「横断軸」はテキストの語りから「外部」の読者に対して変化形成を促す対話的作用であり、2) 「水平軸」はテキスト「内部」に見られるライトヴォルト様式、3) 「垂直軸」は解釈が変遷するなかでも、その「背後」で作用していたある種の統一的意識を捉える R 的・傾向的分析である (本書 124 頁)。この「R 的」とは、編集 (Ridaktion) を意味し、近代聖書学で用いられる J や E といった聖書を構成する資料群を指す記号に対抗して、ブーバーが名付けたものである。J や E が聖書を異なる伝承の継ぎ接ぎのようなものと捉えるのに対し、R は書物の統一的意識 (Einheitsbewußtsein) において編集を経た、「一つ (一人) の精神に基づく作品」であると捉える (本書 181 頁)。ちなみにブーバーとローゼンツヴァイクは、この R を「編集者」とするだけではなく、伝承の形成と

保存に携わった全ての先人達を意図して、「私たちの師（ラビ）」（*Rabbenu*）とも呼んでいた。「傾向史的分析」については、著者は、ブーバーの『神の王権』⁴を翻訳した木田献一によるあとがきを引用して説明する。それによると、モーセをはじめとする預言者的指導者を頂点とする人々のもつ、神の直接支配への信仰より浮かび上がる、社会的・政治的批判の傾向から、諸伝承を分析し捉え直すのが、「傾向史的方法」である。ブーバーはこのような傾向を、原聖書的な雰囲気と捉え、聖書を最終的に編纂した人々も、この雰囲気を共有していたとする。このようなブーバーの聖書解釈の方法論は、彼と同世代の旧約学者であるフォン＝ラート、マルティン・ノート、モーヴィンケル、アウエルバッハにより、その非学問的スタイルゆえに突き放された印象がある。しかし、次の世代の旧約学者である、クラウス、ヴェスターマン、ヴォルフなどは、ブーバーの方法論を先行する研究として肯定的あるいは批判的に評価するようになった。

以上、ブーバーによる聖書翻訳の3つの手法を概観した。ここで著者によって分析される、ライトヴォルト様式が翻訳の事例のなかで実現されている例を、創世記16章「ハガルの追放」において確認する。この聖書箇所は、アブラムの正妻であったサライに子供がいなかったことが原因で、女奴隷であり、アブラムの子を身ごもったハガルが「虐げ」にあうことに焦点が当てられる。ヘブライ語聖書においては、「サライは彼女につらく当たった」（6節）ことによりハガルが出奔し、逃亡先の荒野の泉にて、神の使いにから「女主人の元に帰り、従順に仕えなさい」（9節）と声をかけられた。そして「主があなたの悩みをお聞きになられた」（11節）ことから生まれてくる子供に「イシュマエル」（神聞きたもう）と名付けるよう告知される箇所である。これらの3節における下線部の表現では、*'a-n-h*（アーナー）という語根が、能動を表わすピエル態（苦しめる）、再帰を表わすヒトパエル態（苦しめられる）、名詞形（苦しみ）の形で使用されている。ブーバーとローゼンツヴァイクは、この語根の統一性を保持するために、原型のドイツ語 *drücken* を語根 *'a-n-h* の訳語に充て、これらの3つの変化系をそれぞれ *drückten*（動詞：ピエル態）、*drücken sich*（動詞：ヒトパエル態）、*Druck*（名詞）と訳した。この例からは、日本語の翻訳と違い、ブーバーたちのドイツ語訳聖書がヘブライ語の語根の統一性を重要視して、ドイツ語にもそれを復元したことが明らかである。

以上、本書の内容の要約的な説明を試みたが、評者の力不足のため、その他の重要な論点に言及できなかった点については、ご寛恕を切に願う次第である。以下、本書を通し想起された評者のコメントを記す。

本書の序論において、近年の国際的な研究動向も含めた上で、著者はブーバー研究史の状況を丹念に整理しており、このことは重要な功績の一つとして覚えら

れるべきであろう。ブーバー研究の状況を知りたい人々には、序論の一読を勧めたい。ただし、おそらく紙幅の都合あるいは主題が異なるという理由から、ハンディズムやシオニズムなどに関するブーバー研究史について本書では言及がなされていない。これらの点については、他の著書などにより補足する必要があり、今後、本邦のブーバー研究者が取り組むべき課題でもある。

また、本書を通して、ブーバーの我—汝思想が聖書と強い結びつきがあり、なぜ関連しあうかについては確認できたが、その「影響関係がどちらからどちらへのものか」という著者が立てた課題については、評者には明瞭にならなかった。この問題の解決は、すでに広く受け入れられて、自明なものとなりつつある、完成されたブーバー像から一度離れて、ブーバーの聖書翻訳理論の展開と我—汝思想の展開を、一層ずつ、歴史的に辿りつつ、両者の接点を見つけ、依拠の関係を探るといような地道な作業を必要とするのでないだろうか。

本書は、ブーバーの聖書翻訳において、音声形体、聴覚的形式が重要な要素だったことを指摘している（本書 132～134 頁）。ブーバーがドイツ語へと聖書を翻訳する際に、ヘブライ語聖書の音声をどのように復元していたかという点は、本書の重要な主題であり、その意味では、たとえば、以下のような問題点にも言及する必要があったのではないだろうか。すなわち、「どのヘブライ語聖書の版をブーバーは利用したか」、「ブーバーはアシュケナズとスファラドのどちらの発音を採用したか」、「ユダヤ教の伝承であるマソラ、つまり、単語の意味を決定する母音符号、音符・アクセント・句読点の働きをもつ符号（タアメイ・ハミクラ）などの朗読伝承をどのように受容したのか」。これらの点を踏まえることは、本書の主題である、ブーバーのヘブライ語音声の復元の問題をより正確に理解することにつながり、ヘブライ語聖書に対するブーバーとラビ・ユダヤ教の立場の相違についての理解という副産物をももたらすと思われる。

以上の評者による批判が仮に適切なものだったとしても、ブーバーの聖書翻訳の大部分を明らかにした本書の功績が減じることはない。奇しくも『聖書翻訳者ブーバー』が出版された同年である 2018 年の 12 月に、聖書協会共同訳の日本語訳聖書は 31 年ぶりに改訳、刊行された。マルティン・ブーバー研究に留まらず、今後も大きな課題である、聖書翻訳という問題の再考において、本書が寄与することを期待したい。また非常な時間を要すると思われるが、ブーバーの翻訳理論に則った日本語訳聖書がいつの日か登場することも合わせて期待したい。

注

- ¹ 高橋虔（訳）『預言者の信仰Ⅰ・Ⅱ』（みすず書房、1968年）。荒井章三・山本邦子・早乙女礼子（訳）『マルティン・ブーバー聖書著作集第1巻 モーセ』（日本キリスト教団出版局、2002年）。木田献一・北博（訳）『マルティン・ブーバー聖書著作集第2巻 神の王国』（日本キリスト教団出版局、2003年）。木田献一・金井美彦（訳）『マルティン・ブーバー聖書著作集第3巻 油そそがれた者』（日本キリスト教団出版局、2010年）。
- ² 小林政吉『ブーバー研究』（創文社、1978年）、平石善司『マルチン・ブーバー 一人と思想一』（創文社、1991年）。齋藤昭『ブーバー教育思想の研究』（風間書房、1993年）。稲村秀一『マルティン・ブーバー研究 一教育論・共同体論・宗教論一』（溪水社、2004年）。
- ³ 本書に収められた著者の各論文以外に、ブーバーの聖書翻訳を考察したものとして以下の小野文生の研究論文がある。「マルティン・ブーバーの聖書解釈における〈声〉の形態学 ー「かたちなきもののかたち」への問いについてー」『一神教学際研究』（同志社大学一神教学際研究センター、2010年、第6号、7～35頁）。
- ⁴ 木田献一が付けたタイトルは『神の王国』であるが、著者は、意図的にタイトルを変更している。これについては、本書、185頁の注29に説明がある。